

住居における行動場面に関する研究（梗概） ——人の居方から住居の公的空間を考察する——

場所・行動研究会
代表 高橋 鷹志

研究構成

1. 目的
2. 研究方法
3. 公的空間における姿勢
4. 公的空間における人の居方・関係
5. 公的空間における人間集合と空間スケール・配置形態との対応——1.5mの輪・3mの輪
6. 日本と中国の公的空間の比較考察
7. まとめ

1. 目的

本研究は、居間・食堂に代表される住居の公的空間における人の「居方」を、居住者自身による採集データをもとに分析し、現代日本の住宅の公的空間の意味を再考することを意図している。

1-1 人の居方を対象にした住居研究

本研究の第一の目的は、ある時点で、居住者たち（家族と訪問者）が部屋のどこにポジションをとり、どのような姿勢で、他者とどのような関係をとって何をしているかという生活の場面（本研究ではこれを行動場面と呼ぶ）自体をデータとした住居研究を確立することである。

人間の生活を研究の対象にすることは、言うまでもなく建築計画学の特徴の一つであり、とりわけ住宅に対しては、いわゆる住まい方研究に代表される住様式研究、及び住戸計画の分野で膨大な調査・研究の蓄積がある。しかし多くの場合、結局生活は行為名、「その部屋で何をするか」として扱われ、「ある時間に居住者がどのようにその部屋に居るか」（生活のシーン）自体を直接取り扱った研究は、プライバシーの問題、記録の難しさもあってそれほど多くない（儀礼に代表される人の座を問題とする研究、栗田、竹下らによるビデオ記録を用いた研究などに限られる）。

人が具体的に「公的空間にどのように居るか・居られるか」は住生活の意味・質にとって極めて重要な問題（というより住生活そのもの）であり、これを対象とした研究が確立される必要がある。

1-2 公的空間における居方の問題点

第二の目的は、人の居方に注目することで現代日本住居の公的空間の意味を再考するとともに、その問題を掘り起こすことである。

我が国の住宅は面積・部屋数・設備等に関してはある程度確保されつつあるが、都市の単位としての成熟度の点、及び居間に代表される公的空間が持つべき、多様な生活と様々な関係をアフォードする「場」としての働きという点で多くの課題を残していると我々は考える。そして後者のような多様な「場」としての公的空間を分析するためには従来行われてきた、部屋群と生活行為（名）を適切に対応させるという視点でなく、具体的な行動場面に注目することが必要であると考えられるものである。

また、近年我が国における住宅の近代化・西欧化の再検討が積極的に行われているが、この点に関しても人の居方からの分析視点が不可欠であると考えられる。

2. 研究方法

2-1 研究方法の特色

本研究では、住居内の特に公的空間において、人々が日常どのような生活行為を営んでいるのかを、あるがままに記述しようと試みる。したがって調査は、室内における人の居方—居る場所、姿勢、行為などの基礎データを得ることを目的とした。分析においては、従来の分析単位にとらわれずデータを整理することを主眼とした。

2-2 調査方法

- a. 調査対象：大学・短大生をもつ家庭133世帯を対象としたアンケートによった。世帯属性は fig. 2-1参照。
- b. 調査時期：1990年12月～1991年1月にかけて行った。
- c. 回答方式：調査は、各世帯の大学・短大生自身が行い、fig. 2-2に示す方法に従って回答を記入した。

2-3 分析方法

回答された図と文章をもとに、公的空間で行われる行為、人々の居方を分類した。この際、描かれた図の精度から判別できる範囲内で、人や家具・設備の向きや距離を測定した。

2-4 本研究の構成

本研究では、人々の姿勢（3章）、人の居方と関係（4章）、人間集合と空間スケール・配置形態との対応（5章）、中国の居間との比較考察（6章）の四つの観点から分析を行っている。

2-5 研究方法の位置付け

a. 調査方法について

インタビューでは、被験者が意識していなかったり、言葉として表現できない生活行為は抽出することが困難であるので、観察調査を行うことにした。ただし住居の中では、外部からの観察者は被験者の行動に影響を与えざるを得ない。そこでデータの精度が一定しない短所もあるが、家族の成員自身を調査者とする方法を選んだ。

b. 分析方法について

日常繰り返される住居内の行為は、それらが複合あるいは並立しているのが通常であり、まだ命名されず典型化もされていない行為も存在する。Gibsonのアフォーダンスの概念—生活体に意味のある環境における事物は単なる物ではなく、直接的に知覚される「価値」や「意味」を備えている—や、Barker等による行動セッティングの概念—ある行動とその環境はお互いに依存し、行為のプログラムを備えた環境単位が存在する—などを参考として、新たな単位や規範を提示することに努めた。

3. 公室空間における姿勢

3-1 姿勢のとらえ方

本章では、単なる行為と場所との対応関係ではなく、その場面でとられる人々の「姿勢」に着目した。こうした視点から、典型事例もしくは計画学上注目すべき事例を抽出することで、姿勢を介在させてみた場合の公室空間における人の居方の型について考察する。

収集された場面（人の姿勢を記入した平面図）は、本来連続的な姿勢（動的姿勢）の1断面をとらえている。また図面表現の精度には限界がある。この2点を考慮して、姿勢の分類は必要以上に細かくせず、「立位」「椅座位」「平座位」「臥位」の4種類とした。

3-2 姿勢からみた居方のタイプ

公室空間のどこにどんな姿勢及びその組み合わせをアフォードする資質があるかを行動場面としてまとめると以下ようになる。

a. プレイグラウンドと観客席 (fig. 3-1, 6)

プレイグラウンドとは、ある程度まとまった広さの床面から成る。これは単なる余剰空間（通路など）とは異なり、そこでは立位姿勢でのアクティビティー（ゴルフなど）が定立的行動としてアフォードされる。この行動

所在地	例数	海外 (中国・オーストラリア)	2	家族数	例数	住宅形式	例数
北海道・東北	1			三人	19	一戸建	93
関東(東京)	75(31)	不明	8	四人	67	集合住宅	26
北陸・信越	5	世代数	例数	五人	37	店舗付住宅	3
東海	10	二世帯	108	六人	2	工場付住宅	1
近畿	15	三世帯	17	不明	8	不明	10
中国・四国	9	不明	8				
九州・沖縄	8					合計	133

fig. 2-1 調査対象世帯の属性

- 1) 「家族の集まることの多い部屋（居間といえるもの）」の平面図（1/50）とその中の家具配置を記入する。
- 2) 1)の図をコピーした用紙に「飲食する」「テレビを見る」「客を迎える」「電話をする」「その他」の各場面について、人々の位置、向き、姿勢を記入する。
- 3) どのような場面であるのか、居る人の家族属性などを場面ごとに記述する。

fig. 2-2 調査の手順

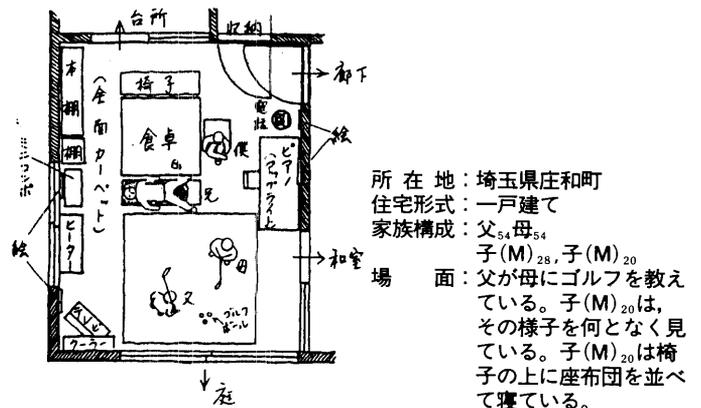


fig. 3-1 プレイグラウンドの事例

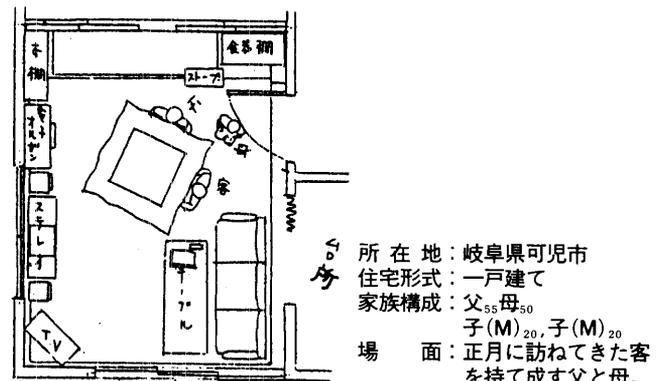
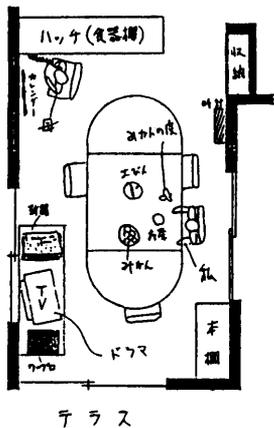
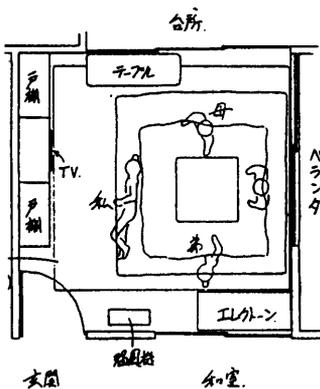


fig. 3-2 主客の場と控えの場の事例



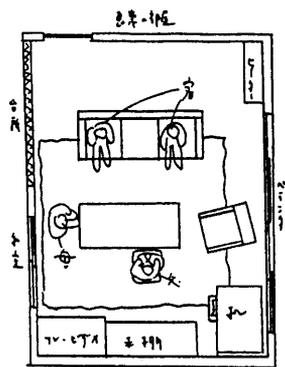
所在地：神奈川県横浜市
 住宅形式：一戸建て
 家族構成：父⁵⁷、母⁵¹、子(M)
 場面：午後10時。母が長電話をしている。子(M)がボリュームを控えめにしてテレビを見ている。

fig. 3-3 ポータブルな椅座位の事例



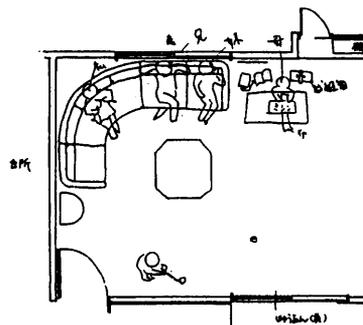
所在地：滋賀県大津市
 住宅形式：一戸建て
 家族構成：父⁴⁸、母⁴⁷、子(M)²⁰、子(M)¹⁶
 場面：大晦日の午後8時。家族全員でテレビを見ている。

fig. 3-4 ごろ寝テレビ場の事例



所在地：東京都江戸川区
 住宅形式：マンション
 家族構成：父⁵²、母⁴⁷、子(M)²¹、子(F)¹⁹、子(M)¹⁶
 場面：客(2人)を持て成す父と母。

fig. 3-5 「接客」場面での多様な姿勢の同時存在



所在地：東京都八王子市
 住宅形式：一戸建て
 家族構成：父⁵³、母⁴⁹、子(F)¹⁷、子(M)²²、子(F)²⁰
 場面：裁縫する母。父はバットの練習をしている。子(M)²²と子(F)¹⁷はTVを見ている。子(F)²⁰は編み物をしている。

fig. 3-6 「くつろぐ」場面での多様な姿勢の同時存在

場面は、アクティビティを眺める観客席に相当する場（プレイグラウンドに向けて置かれたソファなど）と対をなして存在する場合もある。

b. 主客の場と控えの場 (fig. 3-2)

「接客」においては、二つの質の異なる場が観察された。一つは、座卓や炬燵、リビングテーブルを囲んで客と主人とで張られる場（『主客の場』）であり、もう一つは、その場に対して一步退いた場所で、お茶を出す母親などが居る場（『控えの場』）である。『控えの場』は、台所に通ずるドアの近くに形成されることが多い。

c. 固定的椅座位の場とポータブルな椅座位の場

固定的椅座位の場は、リビングソファに座って何かをする事例にみられるように、椅座位姿勢をとる場所がその場に限定されている。それに対してポータブルな椅座位の場は、ダイニングの椅子を電話の近くを持ってきて電話をする事例 (fig. 3-3) にみられるように、椅座位姿勢で一人で居る場所を個人が能動的に作ることを可能にしている。

d. ごろ寝テレビ場とファミコン場

計画学的にどう評価できるかは不明だが、臥位姿勢でテレビを見る場が、炬燵（テーブル）とテレビの間に型として存在している (fig. 3-4)。またこれも評価は分かれるが、平座位姿勢や臥位姿勢でファミコンをする場が、同じく炬燵（テーブル）とテレビの間に型として存在している。

3-3 姿勢からみた現代起居様式の特徴

今回の調査結果全般から、現代日本の起居様式の特徴を姿勢という観点からみると、次に述べるように「多様な姿勢が同時に存在している」ことが指摘できる。

a. 複数の成員が一つのことをする場面

「食事」や「接客」などの場面においては、椅座位姿勢の成員と平座位姿勢の成員が混在している事例が目立った (fig. 3-5)。これは本来椅子座のためにあるリビングテーブルが、座卓として使われている例であり、床座の起居様式が依然根強く残っていることをうかがわせる。一つの行為に参加している成員が、各々に異なる姿勢で居ることは興味深い。

b. 各成員が別々のことをする場面

「くつろいでいる」場面においては、各成員が別々の行為を別々の姿勢でしている事例がみられた (fig. 3-6)。こうした場面においても成員同士は会話をするなどの緩い関係を持っていると推測される。このような居方については、現在のところ定まった名称は与えられていない。従来の「居間での一家団らん」と言うとき、成員が全員で一つのこと（会話など）をしているイメージがあるが、こうした居方とは明らかに異なる居方である。

4. 公的空間における人の居方・関係

4-1. 公的空間のしつらい

a. 公的空間内の拠点

ある時間断面における公的空間内の居住者の居方をとらえるにあたり、まず場が生じる際中心となりやすい場所を「拠点」とし、それを構成する主要な家具を「拠点家具」と呼ぶことにする。また拠点から独立して存在する座具を「独立座具」と呼ぶ (fig. 4-1)。公室内の拠点は多くても3拠点までであり、そのうち、複数拠点のものが8割弱を占め、中でも2拠点型が過半数を占めている (曖昧な場所を持つものを特殊型とする) (fig. 4-2)。

b. 2拠点型公室のしつらい

2拠点型において、拠点家具の組み合わせは多様だが、カーペットや畳敷きのまま何も家具を置かないオープンな場を持つものは2割にも満たない (fig. 4-3)。2拠点間に2間以上の開口部があるかどうかで空間の分節を考えると、2拠点が一体的空間にないものが全体の3割を占める。さらに拠点家具の向きを拠点間相互の視線の重なりからみると、どの座席からも他の拠点到視線が向かない、すなわち視線が重ならない独立的なしつらいになっているものが、2拠点が一体的空間にないものと合わせて約8割に達する (fig. 4-4)。以上より2拠点型では、オープンな場を持つと言うより、拠点家具で場所を埋め互いに独立的にしつらえる傾向が強いと言える。

4-2. 居住者の展開の型

集まった場面のうち、流動的な場面と、一つの拠点到集まってなされるのが基本である食事と接客を除いた、いわゆる団らんはんらんのうの範疇に含まれると考えられる行為・場面を分析の対象とした。居住者の分布の状態からその展開の型は、以下の四つに整理できる。

a. 「1拠点に一緒に居る」(91例)

一つの拠点到全員が集まっている場面である。

①一緒に居て全員で一つのことをしている (fig. 4-5)；拠点家具の想定に最も忠実な居方と言える。テレビ・ゲーム・お茶を飲む等の行為が多かった。

②一緒に居てテレビを見ながらそれぞれ別々のことをしている；(fig. 4-6) ①と③の中間の性格の場面。

③一緒に居ながらそれぞれ別々のことをしている (fig. 4-7)；一つの拠点到一緒に居るのだが、各自が思い思いの行動をしていて共通の関心がないという状態。fig. 4-7では、皆炬燵に集まりながら、父親が読書、母親は作業、そして男子は横になってテレビを見ている。

このうち①②は団らんシーンとして想定される典型的なものといえる。③の拠点家具としては炬燵が圧倒的に多い。炬燵は顔を向き合わせる居方が基本的だが、床座

	家具	数量	%
拠点家具	応接セット (炬燵併用)	43 (16)	47.3 17.6
	食卓	73	80.2
	炬燵	51	56.0
	座卓	4	4.4
	椅子卓	1	1.1
	カーペット	16	17.6
独立座具	机	16	17.2
	椅子	13	14.0
	ピアノ	26	28.6
その他	テレビ	87	95.7
	電話	79	87.1
	ステレオ	22	24.7

拠点数	数量	%
1拠点型	21	23.1
2拠点型	53	58.2
3拠点型	9	9.9
特殊型	8	8.8
合計	91	

*拠点家具：
食卓、応接セット、炬燵
カーペット、座卓、椅子卓

*対象世帯数=91

*「カーペット」はカーペットまたは畳の上
に他の座具が置かれていない場合をさす

*「炬燵」には応接セット併用の場合を含む

fig. 4-1 公室空間の家具 fig. 4-2 公室空間の拠点数

拠点数	組合せ	数量	%
2拠点型	食卓+応接セット	16	25.8
	食卓+炬燵併用応接セット	11	17.7
	食卓+炬燵	13	21.0
	食卓+座卓	2	3.2
	食卓+カーペット	6	9.7
	炬燵+カーペット	2	3.2
	炬燵+炬燵	1	1.6
	炬燵+炬燵併用応接セット	1	1.6
3拠点型	炬燵+椅子卓	1	1.6
	食卓+応接セット+炬燵	5	8.2
	食卓+カーペット+応接セット	1	1.6
	食卓+カーペット+炬燵併用応接セット	1	1.6
	食卓+カーペット+炬燵	1	1.6
合計		62	100

fig. 4-3 拠点家具の組み合わせ

2拠点が一体的空間にない	2拠点が一体的空間にある		
	各拠点の視線が交らない	各拠点の視線が交わる	片方の拠点到オープン場
16(30.2%)	26(49.1%)	5(8.4%)	6(11.3%)
2拠点が壁・家具・間仕切りで仕切られ、開口部が2間以下の場合	拠点内のどの座席でも、正しく座ったとき他の拠点到視線が向かない場合但し、視線は向くが同じ拠点内の他の座席が向いている場合を含む	拠点内の座席に正しく座ったとき、他の拠点到視線が向く座席がある場合	片方の拠点到オープンな場であるため、視線の交わりが不確定な場合

fig. 4-4 視線の交わりからみた拠点の向き

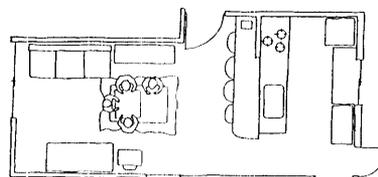


fig. 4-5
1月3日 22:00
3人でゲームをやっている。母はお茶を飲みながら見ている

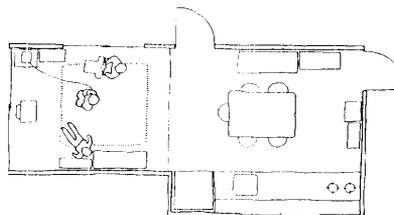


fig. 4-6
1月12日 12:00
私はテレビを見ながら電話。母は洗濯物をたたくている

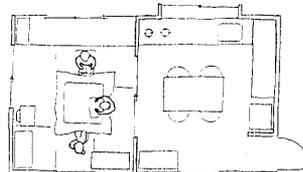


fig. 4-7 1月6日22:00
父は本を読んでいる
母は学校の仕事をしている
私はテレビを見ている

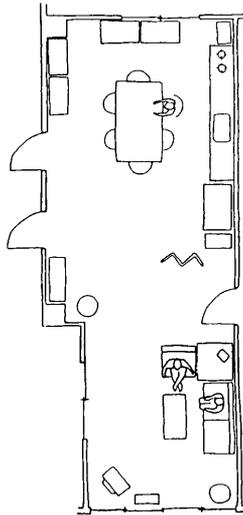


fig. 4-8 1月5日12:00
母は本を読み、
父と妹がテレビを
見ている

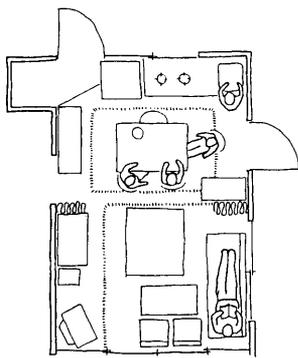


fig. 4-9 1月1日 21:00
私と姉は食事の後、
祖母の遊び相手にな
っている
母は片付けをしながら
会話に加わる
父はテレビを見ながら
本を読む

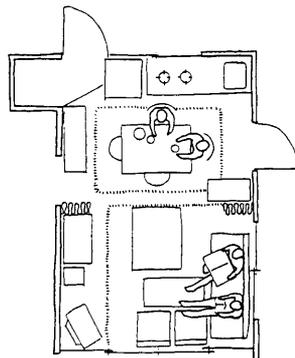


fig. 4-10 12月26日 23:00
父は本を読みながらテレビを
見る。私は新聞を読みながら
テレビを見る。姉は会社の愚痴を
大声でこぼす。母はお茶をつい
だりしながら姉の話し相手に
なっている

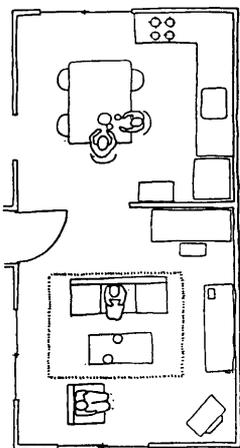


fig. 4-11 12月27日 20:00
食事の後、父と母は食堂で
お酒を飲みながらお話
私と妹はアイスクリーム
を食べながらテレビを見
ている
弟は塾に行っている

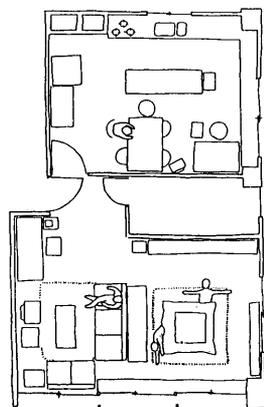


fig. 4-12 22:00
父はソファでテレビ
姉と母は炬燵で寝ている
弟は別の部屋でテレビ

式座具であるため、様々な姿勢が可能であり、一緒に居る人とお互いに視線をはずしつつ居ることも可能である。

b. 「一人だけ別の拠点に居る」(13例)

他の成員は一緒にある拠点に居るのに、一人だけそこから離れ他の拠点に居る場合である。fig. 4-8では、父親と女子がリビングルームで一緒にテレビを見ている時、母親が一人食卓で読書をしている。fig. 4-9では、食卓で祖母を交えて女性だけで会話している時に、父親が一人リビングルームでテレビを見ている。このように、母親の場合、他の成員が居るテレビのある場所から離れ一人食卓に居る、父親の場合、他の成員が会話をしている場所から離れて一人でテレビを見るというような傾向がみられた。

c. 「2拠点に二組に分かれている」(13例)

公的空間内に居る人々が二つの拠点に二組に分かれている場合である。fig. 4-10は、父親と女子が本や新聞を読みながら居間でテレビを見ているのに対し、母親がもう一人の女子の愚痴の相手をしている場面である。fig. 4-11では、居間でテレビを見ている子供達と別に両親が食卓で酒を飲みながら話をしている。このように母親がテレビのない場所で、女性同士の会話を、あるいは父親と大人同士の会話をしている者がほとんどである。公的空間にはほぼ確実にテレビが置かれ、家族の居る場所に大きな影響を与えているが、その一方でテレビの無いところで純粋に会話だけなされる場合もあり、その際テレビを見ているグループとは別に会話ができる場所という意味が求められていると考えられる。なお会話中心の場が複数成立していることはまれであり、複数の場合も片方はテレビを見ながらといった副次的なものである。

d. 「公室内の各所にばらばらに居る」(55例)

公的空間内に居る全員が各拠点や独立座具に散らばっている場合である。幾つの特徴的な関係を見いだせる。
①別々の場所で別々のことをしている (fig. 4-12)；各拠点が独立的に据えられ、それを各自別々に占め、他の成員と無関係に居る場面である。fig. 4-12では公室内部に3種類の拠点が作り出されており、母親と女子が炬燵で居眠り、父親と男子がそれぞれ応接セット・DKでテレビを見ている。各拠点が独立したひとりひとりの場という意味を持っていると言える。

②いろいろな場所からテレビを見ている (fig. 4-13)；一つの拠点で一緒にテレビを見るのではなく、公室内の異なった場所からテレビを見ている場面である。成員間の関係は直接的ではないが、テレビを介した間接的な関係が生じていると言える。人的関係が二つ以上の拠点にまたがっている数少ない例の一つであり、その点は注目してよいと思われる。

③特定の活動を傍観している人が居る (fig. 4-14)；事例

数は少ないが、ある人が他の家族のしていることを一歩退いた位置から傍観している、いわゆる「見る一見される」関係にある場面である。fig. 4-14は、夕食後カーペット上で父親が母親にゴルフを教えている様子を、男子が食卓の椅子から何となく眺めている場面である。

④空間全体を視野に収めつつ居る人がいる (fig. 4-15)；特定の活動を見るのではなく、公的空間全体を視野に収めつつ自分の場所を確保している者が居る場面である。

fig. 4-15では父親が独立座具によりどの拠点にも属さない自分だけの居場所を作っているが、その位置は孤立的でなく、室内全体を見渡せるような場所である。公的空間の中で、自分の世界に没入するのではなく、室内の様子全体を意識しつつ落ちついた場所に居る居方と言える。

⑤一体的空間内の様々な場所で別々のことをしている (fig. 4-16)；公的空間が一体的に作られている中で、様々な拠点家具・独立座具その他の場で様々な行動がなされている場面である。1拠点に集まった上で別々のことをしているわけでもなく、各自の場がそれぞれ孤立的になっているわけでもない、その中間的な関係である。

fig. 4-16では、父親が簡易テーブルの上でワープロ、母親はソファで読書、女子は食卓で作業、男子は長いソファで居眠りをしている。それぞれ自分の場所を持って公的空間内に散らばりつつも孤立的でない状態と言える。

4-3 まとめ

事例全体を通じて言えることは、幾つかの拠点にまたがった場があまり見受けられなかったことである。このことは、拠点が作られる場合に、それぞれが独立したまとまりとなるような構成が意図されているケースが多いことが一因になっていると思われる。

家族と密に疎に多様な関係をとりつつ居られることが公的空間の価値だと考えると、若干例見られた、一緒に居ながらもお互いに強い結びつきを持たずに居るという居方や、他の拠点と一体化した場をもつ居方は今後の公的空間内の生活スタイルに対し示唆に富む。

拠点家具の中では、炬燵やカーペットでの人的関係のとり方が興味深い。炬燵では、ちょっとした姿勢の取り方でお互いに視線をはずしつつ居る場面が多数見受けられ、一緒に居ながら別々に居る使われ方と言え、カーペットでも、他の拠点と結びついた場をもっているという事例が数多くあった。

最後に、事例に開口部を意識し戸外の風景を視野に入れながら居られる場所がほとんど無かったことも指摘しておきたい。すなわち「窓辺」という居場所が成立していない。

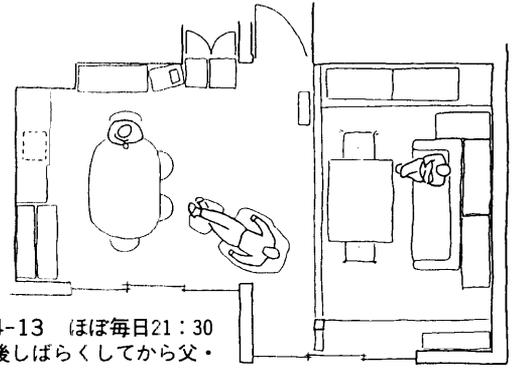


fig. 4-13 (ほぼ毎日21:30
食事後しばらくしてから父・
母・私はテレビを見る
受験生の妹は自室)

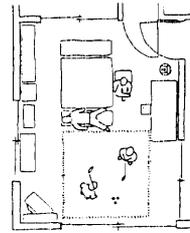


fig. 4-14 1月5日22:45
父がゴルフを教えている
母はそれを適当に聞いている
兄は幅の狭い椅子に座布団を
並べて器用に眠っている
僕も父が教えているのを何と
なく見ている

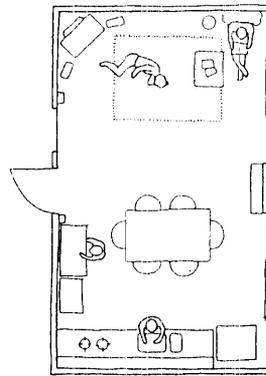


fig. 4-15
食事の後、母と私は後片付け
兄はテレビを見ていて、父は
本を読んでいる

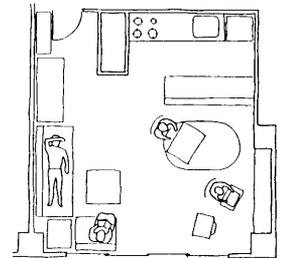


fig. 4-16 1月9日21:00
妹はテーブルを広げて作業
父は簡易テーブルの上でワープロ
母は本を読み、自分は居眠り

5. 公的空間における人間集合と空間との対応

5-1. 公的空間における人間集合と空間スケール・配置形態との対応——1.5mの輪・3mの輪

ここでは家族の集合の空間スケールと形態に注目する。家族の食事、団らん、接客などにはある決まった距離(大きさ)と配置形態(求心的な環状)が対応する(「型」をもつ)。これは個々の住居の空間特性にかかわらず一定して現れる性質である。

人間同士の距離はそれぞれの関係に応じて分類され、そのうち住宅内での行為、スケールに関連深いのは、0.5~1.5m(会話が行われる距離)、1.5~3m(会話可能な上限・他人同士が接近できる限界)である。人間同士がこれらの距離内に居ることはその行為を可能にする。

平面上に1.5m、3m直径の輪を想定し、その中に家族

の成員が存在するという事は、お互いがそれぞれの距離の可能性の中にある(向きが異なってもちょっと向きを変えるだけで域内に入り、それが可能となる潜在的な可能性の中にある)ことを表すものと意味づけられる。家族や客などの人々がこの2種類の輪の中にいるかどうかによって、公的空間内での居方は特徴づけられる。

a. 1.5mの輪：親密な輪，会話域の輪

「食事・喫茶」、「団らん・接客」など、コミュニケーション・団らんを主とする積極的かつ親密な集合が1.5mの輪の中で行われている(fig. 5-1)。

これらには家具として「食卓」、「炬燵」が密接に関連している。これはそれらがふさわしい大きさを持っているということでもある。しかし応接セットでもコーナーを利用したり、小椅子を用いて1.5mの輪を作ることがある(fig. 5-2)。また家具と無関係のものとして、座位でカーペット上での「ゲーム」、立位での「共同作業」がある。

b. 3mの輪：団らん，準親密な輪

「応接セットでの団らん・接客」、「大きめの食卓・炬燵」を使つての団らん・接客、「異種の家具群の近い部分」を使つての団らんなどが3mの輪の中で行われている(fig. 5-3)。1.5mよりは一步退いた居方ではあるが、次のcに比べると積極的な集合である。

c. 2重の輪 (1.5m+3m)

①「はずし」型(ドーナツ型)

1.5mの空白の輪の周囲に形成された3mの輪である。「食卓で姿勢を変える」、「こたつで寝ころぶ」など、1.5mの輪を意識しながら、意図をもってそれを避け、はずした、消極的団らんである(fig. 5-4)。

このように行為の連続の1断面として、団らんなどの「型」から、場を共有しながら一步さがった居方を「型からはずし」と呼ぶ。「はずし」は、距離をおく(さがる)、向きを変える、寝ころぶなどによって、所属感や復帰できる可能性をもちながら、親密な団らんから一步さがるので、公的空間における特徴ある居方と言えよう。

②2重卵型

1.5mの輪の集合を中心に、それに参加する人によってその周囲を3mの輪がとりまくものである。「食事の準備」、「接客の給仕」、「見物人」、「挨拶にきた人」などの場合である(fig. 5-5)。また「はずし」型へ移行する経過として中心を核として残したまま何人かが「はずし」した場合もある(fig. 5-6)。

2重の輪の特徴として①②とも1.5mの輪に居る人の姿勢と3mの輪に居る人の姿勢とが異なることが多い。

このように2種類の輪に入るかどうか、公的空間に現れる人間集合の意味・性格を特徴づけることが示された。

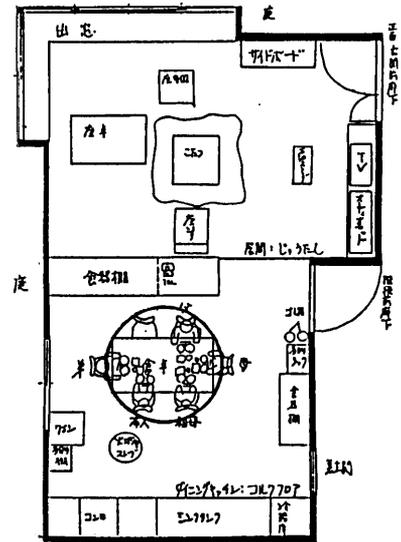


fig. 5-1
1.5mの輪で食事

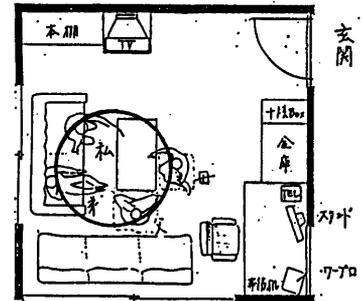


fig. 5-2
応接セットの部分で
1.5mの輪

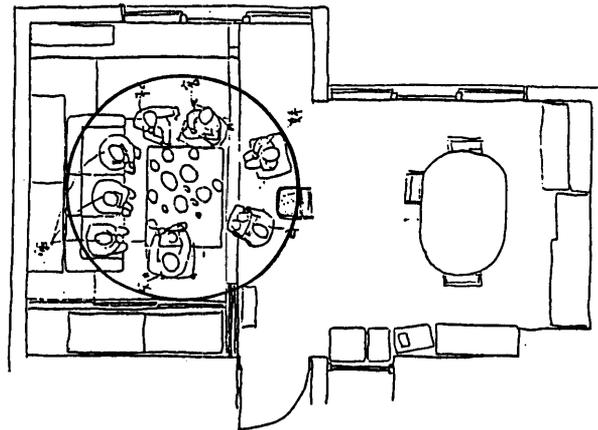


fig. 5-3 3mの輪での接客

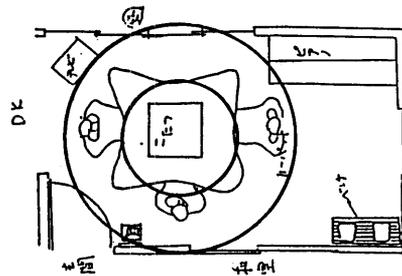


fig. 5-4 「はずし」型

5-2. 室空間との対応——意識の輪の連鎖

これらの輪の特徴とかかり方をもとに公的空間のスケール、形状、家具の配置などの特徴づけができる。

例えば1箇所に1.5mの輪だけできる場合は、会話など親密なコミュニケーションにのみ対応し、狭く、家具などの規制の強い固定的な空間となる。1箇所で3mの輪ができる場合は自由度が増し、1室の使い分けができる。

更に、このような輪の重なりが2箇所以上にできると、意識・行動の上での空間のつながりが特徴づけられる。例えばどこにどのような種類の輪が幾つできるかは、公的空間の多様性の一面を示すものである。

中でも特徴的なものは、連続したLDK空間などで、輪が幾つかのキーとなるポジションを介して連鎖して現れることである (fig. 5-7)。このような輪の連鎖は、公室空間の中での場を共有しているという意識の連鎖があることを表す一面と言える。

このように2種類の輪とその連鎖は、一見均質にみえる公的空間も意識のつながりという点で様々な可能性を持っていることを読み取る一つの見方となる。

6 日本と中国の居間の比較考察

6-1 はじめに

この章では、日本と中国の居間を比較文化的視点から考察することを目的とする。1990年9月、中国の天津市内に立地する集合住宅を対象とした実態調査を行った。更に、中国の建築学科の卒業生に対する郵送調査と日本在住の中国人留学生に対するヒアリング調査によって、21世帯のデータを集め、それをもとに中国の現代の集合住宅の空間構成と住様式について考察し、更に日本で行われたアンケート調査との比較を行った。

6-2 日中現代集合住宅の平面構成

中国の現代集合住宅一単元式住宅は一般に一つの庁と幾つかの居室によって構成される「n室1庁」の形式である。住戸には幾つかの居室、サービス空間である台所、トイレ、貯蔵室等があり、これらを庁という空間がつないでいる。更に室外空間ベランダがある (fig. 6-1)。

中国の集合住宅の中で特徴的と見られる空間が庁である。庁は住戸の入り口に位置し、部屋と部屋をつなぐ動線上の重要な役割を持っている。しかも、ここは食事、接客、勉強、子供の遊び等が行われる場所となり、また、物置を備え、場合によってはベッドを置き、子供の成長による就寝分離、老人の同居から生じた住行為のはみ出しを受け入れる場所になっている。

一方、日本の場合は、集合住宅の平面構成は玄関、そして、LDK、個室を廊下がつないでおり、機能別に室空間を用意するという計画の特徴が見られる。

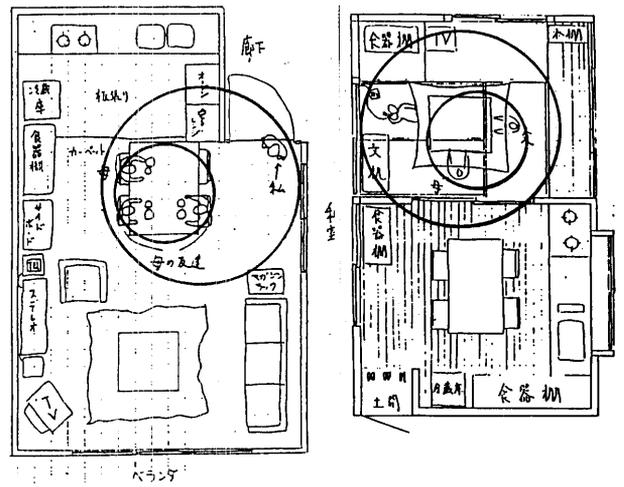


fig. 5-5 2重卵型
(挨拶に来た人)

fig. 5-6 2重卵型
(一人が「はずし」)

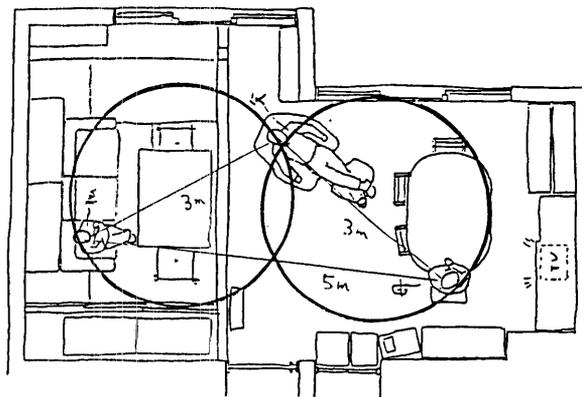


fig. 5-7 輪の連鎖

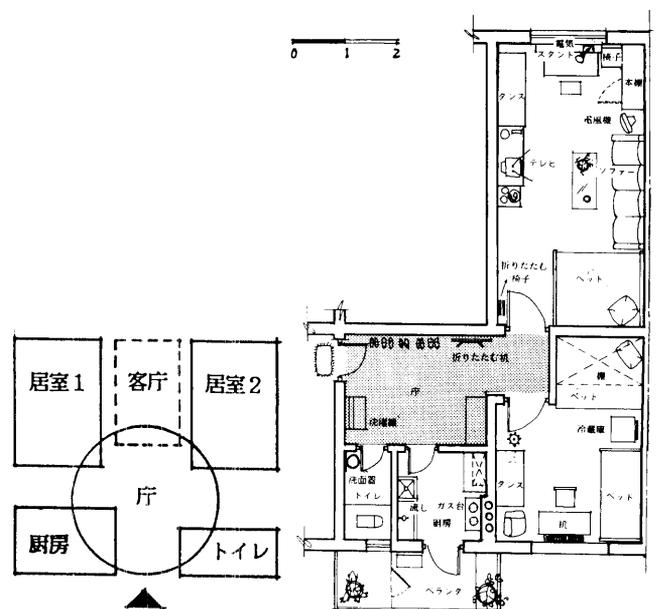


fig. 6-1 中国の集合住宅の平面構成と実例

6-3 食事について

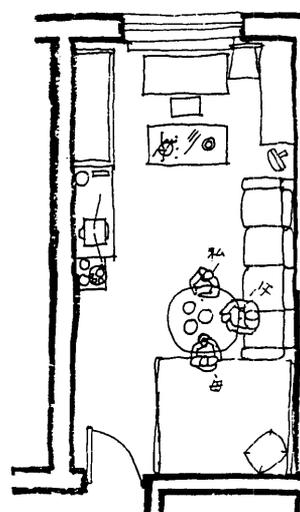
食事のセッティングに関しては、中国と日本はかなり異なる。ほとんどの日本の集合住宅では食事空間があらかじめ設定されており、食事を行うための家具—食卓と椅子があり、その置き場所も固定されているのが普通である。

これに対し中国では多くの家庭は専用の食事空間を持たない。すなわち食事空間は団らん・接客空間等の別の空間と重なっている。加えて多くの場合、食事用の固定家具はなく、普通折りたたみ机と折りたたみ椅子を使って食事をする。つまり食事を終わるとその食事空間もなくなる。食事する場所も家庭によって違い固定していない (fig. 6-2)。一般にはリビングルーム (fig. 6-3) や庁で食事する例が多く、台所ではしないのが普通である。

この点では日本のDKとの違いがはっきりみられる。ただし、日本のDKも採取された場面から明らかのように、人々はここで食事するだけではなく、接客、団らんなど食事以外の行為に対してもしばしば使うことは言うまでもない。つまり、機能別に空間を用意する計画方法に対し、人々の実際の使い方にはかなり柔軟性が見られるのである。

食事場所 使用家具	寝室	庁	厨房	合計
折りたたみ机	9世帯	4世帯	1世帯	14
食卓	2世帯	5世帯	0世帯	7
合計	11	9	1	21

fig. 6-2 中国の集合住宅における食事場所と食事時の使用家具の対照表 (対象とした21世帯)



所在地：中国天津市河東区
住宅形式：単元式住宅
家族構成：父₅₄母₅₂
子(M)₂₆
場面：1991年2月24日
昼御飯の場面
(晩御飯も同じ)
食事の時、折りたたみ机を置くため、サイド・テーブルは動かされた。

fig. 6-3 (fig. 6-1 の家) 食事する場面

6-4 接客について

今回の調査結果を見ると、中国と比較して日本の家庭の接客行為がその種類・形式が単純であることが感じられる。客の種類について言えば、親しい友達や親類に限られ、形式については食卓、炬燵、ソファーセットを拠点として、対面型で接客する例が多い。

中国の例では、家族が多い場合、専用リビングルームは設けられないため、1室を寝室兼居間として使っている。更にソファー、ユニット家具、テレビなどの主要な家具はこの部屋に置かれ、いつでも客を迎えられるように普段から整えられている。接客の種類は、友達や親類から職場の同僚まですべての客を家で接待する。その形式は fig. 6-4 のように狭いリビングルームでもソファーセット、折りたたみ椅子、ベッドを使って、空間はなるべく広く使う点が日本の対面型の接客と対照的である。また「家人が客をはさんだ」位置関係が多いのも特徴である。

6-5 団らんについて

今世紀、洋風化によって、日本の住様式は和洋折衷になった。このため3章で見たように、人々はリビングルームの床で横になったり、寝ころんだりすることができる。その様々な利用形態は、ある意味で団らん空間を豊かにしているとも言える。一方中国では、fig. 6-5 のように団らんの時にソファーセットを使う例が多く、姿勢も硬く、日本のようにくつろいだ姿勢は比較的少ない。

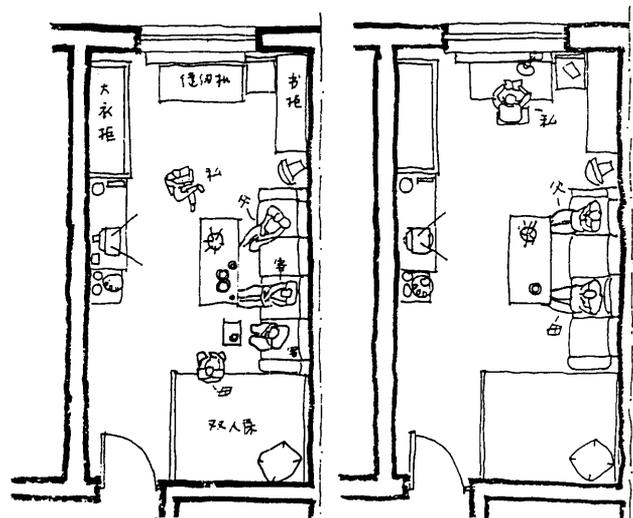


fig. 6-4 接客する場面
1991年2月20日晚8時頃
客は隣の単元に住んでいる夫婦である。

fig. 6-5 TV を見ている場面
1991年2月23日晚8時頃
晩御飯後、両親はTVを見ていて、私は本を読んでいる。

伝統的な中国住宅では“炕”という造付けのしつらいがあった。この場合、寝室のほぼ半分は“炕”である。“炕”はもちろん上で寝るのだが、それ以外、団らん、食事、相手が親しい友達や親類の場合にはここで接客もする。しかし、現在の中国の住生活は西洋の影響を受けながら発展した結果、“炕”で見られた多様な団らんの形式は失われてしまっている。

7. まとめ

7-1 研究手法について

居住者自身による生活場面の記録という簡便な手法によって、ヒアリングあるいは外部調査者による写真記録などでは把握し難い、住居の現実の行動場面（公室にどう居るか）を延べ500例以上採取することができた。むしろデータの信頼性、精度、場面の種類など今後の課題は多い（後述）。

7-2 行動場面から読み取った現代住居の公的空間

得られた行動場面から以下の結果を得た。

まず姿勢に関しては従来指摘されてきた起居様式の混在が、同一場面の中で様々に組み合わせられている様子が明らかになった。またプレイグラウンド、主客と控え等、幾つかの場面パターンを読み取ることができた。

また人々の居方と関係に関しては、中心を持った集りの場としての拠点を手がかりにして、公的空間の中の場の分節を分類し、拠点相互が関係を持たず、分離・孤立的にしつらえられる例が多いことがわかった。また比較的少数であるが拠点相互あるいは居場所相互で緩やかな関係を持つ例も見いだすことができた。

集合の形態とスケールでは人の集まる状態の中から、1.5mの親密な輪と3mの準親密な輪の2つを抽出し、更にその組合せとして「はずし」「2重卵」といった生活場面を記述するパターンを提示した。

また中国との比較においては、食事のセッティング、接客時の並び方、また行為と部屋及びセッティングの対応状況の差など、住居の公的空間の概念の違いを示唆する例が指摘された。

7-3 居方・場からの住居計画論の可能性

従来の住居計画においては、機能（多分に抽象的な生活行為）と室空間の適切な対応関係、あるいは人間工学的なデータをベースとした動作空間の視点からの平面・規模計画が中心で、具体的な人の「居方（居られ方）」によって多様な生活・関係が発生する場としての「公室空間」をデザインするための言語が充分ではなかった。

今回の行動場面分析から得られた、特徴的な人の居方（場面）や、それを記述する単位（例えば1.5m・3mの2種類の輪）はこのレベルを取り扱う計画言語となる可能性を持つ。

7-4 今後の課題

調査方法に関しては、まず今回は結局「食事」「テレビ」といった行為別にデータを収集したが、こうした言葉で説明し難い、より日常的な場面を指定する方法を開発する必要がある。また行動場面データ中の人間のスケール

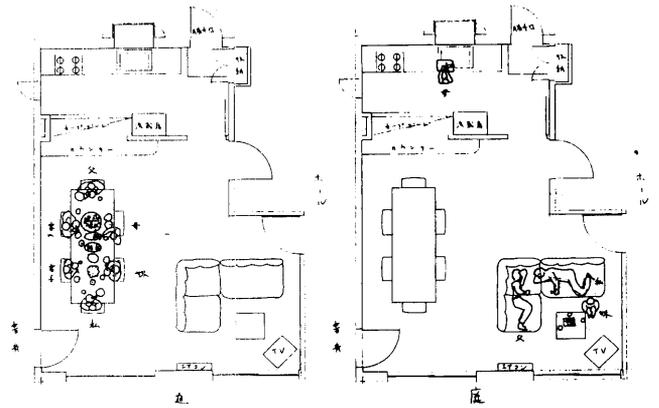


fig. 7-1 ダイニングにテーブルでの会食
fig. 7-2 ソファでのごろ寝+TV

や姿勢の記述のばらつきをなくす手法（例えばテンプレート的な記述手法）の工夫も必要であろう。

また今回は得られた行動場面の中の姿勢や分布関係など物理・空間的部分の分析が中心となり、場面の住居の中での意味についてはあまり扱えなかった。例えば今回のデータの中でも、接客の場面では個人の客は基本的にその個人が接客するが、母親はすべての客を対応する傾向があった。また家具の意味に関しても fig. 7-1,2 のような事例をみると、いわゆる「公-私（家族）」の性格が逆で、ソファは公的というより完全にテレビとごろ寝のためのしつらいで、むしろダイニングテーブルの方が社会性を持っているように見える（ダイニングテーブルで個人の書き物が行われることを考えると公-私でなく「活性-弛緩」というような性格付けが適当にも思える）。これらの点の検討は次の課題である。

更に本研究は最初の試みであり、調査対象は大学生をもつ家庭に限定されている。すなわちライフステージに限定されており、かつ住居形式、地域性との相関については分析していない。トータルな住様式を問題にするためには、これらの点を考慮した調査対象の選択・分析が不可欠であることは言うまでもない。また多くの研究が指摘するように行動場面は文化差が極めて大きい。中国のみならず比較文化的調査は特に重要になるだろう。

〈研究組織〉 場所・行動研究会

主査	高橋 鷹志	東京大学教授
委員	西出 和彦	千葉工業大学講師
	鈴木 毅	東京大学助手
	横山 勝樹	女子美術短期大学講師
	渡辺 秀俊	千葉大学助手
	大沼 徹	楨総合計画事務所
	古賀 紀江	東京大学大学院生
	橘 弘志	同
	王 青	同
	古谷 透	千葉工業大学学生